

男性と性差別

2006年6月、ヨーロッパでのメンズワークショップにおけるティム・ジャキンズの話

私たち男性は様々なかたちで傷ついています。どんな人間も傷つきますが、男性はある決まった組み合わせによって傷つきます。男性は特定の集団によって傷つくのではなく、社会全体によって傷つきます。みなさんが傷を植えつけられたときにいちばん大きな役割を果たしたのはだれですか？ もしかしたら父親だったかもしれませんね。

一方、女性は男性によって抑圧されています。

私たちは大きくなるとまわりの女性に起きていることを目にします。自分の母親や姉妹がどんなふうにいるかを見ます。女性たちがどんなふうに使われているかを見ます。それは理不尽で人間的ではありません。私たちはそのことに恐怖を抱きます。私たちは子どもとして抑圧の対象とされ、なおかつ性別の傷にもさらされ始めます。

男の子は最初から性差別の傷を持って生まれてくるわけではありません。それは男の子に植えつけられるものです。そしてそれは彼らにひどい影響を与えます。全人口の半分から切り離されるのですから。それが何歳くらいにどんなかたちで起こるかは国によって少しずつ違いますが、かなり早い段階に男の子は分け隔てられ、異なった扱いを受けます。女性もまた異なった扱いを受けます。どちらも良い扱いはされません。どちらも思慮深い扱いはされません。そして両方に植えつけられるもののなかに、互いに対する態度があります。

私たち男性はそれぞれがその人なりの性差別的態度を身につけていきます。女性をよく知れば知るほど、男性は性差別の衝動と戦うことができるようになります。しかしいったん植えつけられた傷は、ディスチャージする以外に取り除く術がありません。男性の多くはずっと以前から性差別に気づき、正しくないことだと考えてきました。そして性差別的に行動しないようにしています。良い男性になろうとします。私たちは女性に植えつけられた理想の男性像にかなった男性になろうとします。ある意味で女性は、性差別から自分を守ってくれる男性を探し求めるように教え込まれます。どうすればそんな男性になれるのでしょうか？ どうすればそんな理想の男性を演じられるほど明晰でいられるのでしょうか？ どうして女性はそんなことが可能だと本気で考えられるのでしょうか？ もちろん、女性は本当にそう思っているわけではありません。そう思わされているだけです。

女性はこうした仕組みによって、自分の息子にこの種の性差別を伝える役目を果たしてきました。母親は自分の息子を愛するがゆえに、息子にまわりの男性とは違うものを求めます。男性の傷を持ってほしくないからです。私は男性が自分の小さなころについて取り組むのを手助けしてきましたが、母親によって身につけさせられた態度についてこんなふうにする男性がいます。「生まれたばかりだというのに、もうすでに何かの間違った感じがするんです。私は何をしたのでしょうか？」私たちは途方に暮れます。男性は女性が持つ性差別による影響にほとんど気づいていないからです。

そう、みなさんがこれだけは見たくないと思っているある種の性差別があるのです。それによってみなさんは男性としてこうあれと教え込まれました。そのために男性は特定のものごとについて気を配るように女性から求められます。両者がそのことについて話し合ったわけではありません。そうするのがベストであることをみなさんが了解したわけでもありません。ただみなさんは男性であるというだけでそれを求められます。しかし私たちは、女性の持つ性差別がどれほど深く、どれほど深く植えつけられ、そのために女性がどれほど異なった人生観を持つようになったかについて想像することが困難です。

また、女性は私たちにはない利点を持っています。女性は男性よりもディスチャージすることを社会から許されています。そのため女性は友だちの作り方を知っています。たぶんみなさんの連れ合いは友だちをつくるのがみなさんよりずっと得意でしょう。みなさんがだれかと一緒に何かをしたら、そ

れは恐らく連れ合いのコネによるものでしょう。私たち男性はそれを当てにしています。

女性とパートナーシップを結んだ男性は、世界に対する見方を女性に頼りがちです。女性は私たちよりもずっと幸せであり、男性は彼女が幸せでありさえすれば自分の人生も幸せであるように思えます。彼女が幸せでなくなると男性はすぐに心配になります。どうなってしまうのか心配ということもありますが、世界に対する見方を彼女に頼っているからでもあります。彼女が生きていることをどれほど喜んでいるように見えるかに頼っているのです。私たちはそれによって自分自身の世界に対する見方を補強しています。それがなくなってしまうと、あらゆることに自信を持ってなくなります。ものごとがうまくいっていないように感じられます。なぜだかわかりませんが、うまくいっていないように感じられるのです。

私たちは性差別が女性にしていること——性差別が少女時代の早い時期にどれほど徹底的に入り込み、どれほど傷つけ、可能性を狭めてきたかに注目し、理解しようとすることができます。文化によって違いますが、女性は少女時代の始まりに様々なことを禁じられます。私は十二歳のとき、アメリカ合衆国の性差別から隔絶した世界に触れたことがあります。近所に先住アラスカ人の家族が移住してきたのです。彼らの文化は私たちのものとは大きく違っていました。家族の中に私より一歳年下の女の子がいました。彼女は近所にいるほかの女の子とは全然違っていました。おどおどしていませんでした。おとなしくしていませんでした。彼女はけんかもしました。殴ったりもしました。それはすてきなことでした。自分のからだについて恥ずしさを感じていませんでした。自分自身のことを何も恥じていませんでした。彼女は自分が重要で価値のある人間であることを知っていました。

ほとんどの女性はそんなふうには感じられません。自分が存在していることのすばらしさがわかりません。だれかを喜ばせるようにつねに条件づけられています。だれかを喜ばせていればよいのです。父親、恋人、夫——だれでもかまいません。ほとんどの場合それは男性です。私たちにはそれが理解できません。しばしば男性に全然頼っていないようにも見えます。私たちは女性が対処しなければならないすべてのことについて考える必要があります。男性もまたそれに対して無意識のうちに応えています。

手がかりとして二つのことが頭に浮かびます。一つは、女性のどんなところに耐えられないかについて知ることです。自分の凍りついた希望を女性がかねてくれることを願っている男性は、何でも許せてしまうのかもしれませんが。しかしどうしても腹立たしく思えるときがあるはずで、ある種の口調で話す女性がまさにそれです。多くの男性にとって、それは落胆していることを示す口調です。それを聞くと私たちはその女性の首をへし折りたくになります。これは性差別の一つです。彼女が混乱を見せると私たちは再刺激され、無分別に行動するか、無力感に陥ります。そしてその女性も自分自身も二人の関係性も放棄します。

もう一つは、女性にどんなことを期待するかについて知ることです。彼女がどんな人かもわからずに何を期待できるのでしょうか？ みなさんはたくさんの方を期待しますが、そのことを期待してよい理由の一つもありません。どんなグループに属しているどんな人であろうと、だれかに何かを期待してよい理由はどこにもありません。その人のことを知らないかぎり、その人と関係性を築かないかぎり、その期待は現実に基づいていません。その期待は本当のその人ではなく、その人がこうすべきとみなさんが考えるものに基づいています。それは自分とのかけがえのない関係性ではなく、社会の期待に基づいています。あらゆる関係性はかけがえのないものはずです。そこには二つのかけがえのないところが関わっています。両者にとって有意義な関係性をつくりだすことができます。それはこれまで見てきた関係性、これまで存在した関係性と似ている必要はありません。ともすると私たちの関係性はどれも互いにとても似通ってしまいます。それは私たちがそれを選んだからではなく、再刺激によって互いに考えが制限されてしまうからです。

私たち男性は抑圧の最後の手段として扱われてきました。ほかのすべてのことがうまくいかなくなると、私たちは殺し合いをするために武器を持って行進させられます。傷があるので、私たちはそうしたことに従ってしまいがちです。しかしそうした役割を拒絶する賢さも持っています。抑圧者としてふるまうことを拒否することができます。また、自らの傷をなくすためにも、だれかに抑圧的になることを拒否す

る必要があります。抑圧者パターンを持っているかぎり良い人生は送れません。たとえそのパターンを行動に移さないにしても、それは頭の中にあり、それによって私たちは互いに分け隔てられます。

女性に対して抑圧者となることを拒否することが重要です。女性は何世紀ものあいだ男性に抑圧されてきました。すべての国のすべての女性がです。それをしたのは私たちではありません。しかし私たちは抑圧者パターンを持っています。そこが混乱する点です。「おれはこれまでずっと良い人間だった。何もおまえにひどいことはしてこなかった。なのにおまえは腹をたてる。そんな目にあう筋合いはないのに」けれども、自分がそのような標的にされるべきではないという考え方は必ずしも正しくありません。私が抑圧者の傷を持っていることはどんな女性もわかります。どんなに良い人であろうとしてもです。そして私とその傷を持たないことを彼女がどれほど望もうとも、私はそれを持っており、それは私と彼女の関係性を損ないません。たとえ私が何もひどいことをしなくても、その傷があるために私はその関係性に完全に参与することができなくなります。私の脳の一部は傷を隅に押しやって傷で行動しないようにしています。女性のパートナーを持つ男性はおそらくこんなふうに言われてきたはず。「あなた、何を考えてるの？」何も考えていません。彼女が聴くことができそうなことは何もです。それは私たち二人が傷を持っているからにすぎません。しかしそのために私たちは分断されています。彼女は私たちの戦いがわかりません。彼女にわかるのは私たちにできないことがあるということだけです。私たちが何かを隠していると思うかもしれません。確かに隠しています。だからといって私たちが隠すのをやめれば彼女はそれに対処できるというわけではありません。なぜなら多くの場合、性差別が関わっているからです。ときには暴力もです。要するに、私たちはこの傷をディスチャージしないかぎり、彼女と真の関係を結ぶことはできないということです。注意深いうわべだけのすてきな関係性——それも期待以上の——は持てるでしょう。しかしほんとうはそれ以上のことが可能なはずで。

つまり、私たちは女性からの助けを期待せずに、こうした傷のすべてに立ち向かう術を見つけ出さなければなりません。ところで、女性からの助けがないとすれば、私たちはどうしたらいいのでしょうか？ 私たちは男性同士でこの傷に取り組むことに消極的です。たとえ女性にこの傷が取り扱えないとしても、女性と一緒にいるときのほうが遥かに積極的になれる。しかし私たちはそのやり方を学ばなければなりません。また、それができます。

私たちはとくに、女性から直接受け取る再刺激に取り組む必要があります。私たちが性差別によって受けてきた傷の一つは、女性を力強い完全な人間であると思えなくなっていることです。私たちは、女性も同じように知的であり、勇気を持てると思えないでいます。女性はみな知性がなく、勇気を持つ力はないと考えることは、間違いなく性差別の一つです。女性は、たとえ難しいと私たちには思えることでも、それをやる機会を与えられるべきです。私たちは女性にそうした機会が与えられることを求めるべきです。たとえ女性にどんな傷があろうと、それに挑戦することを手助けすべきです。

自分の人生を望み通りにするために、私たちは抑圧者としての役割を捨てる必要があります。その役割は私たちが望んだわけでも選んだわけでもありません。またその役割によって私たちは自分を悪く思います。私たちはそれを終らせる決断ができます。私たちはそれを終らせる第一歩を踏み出したばかりです。自分が抑圧者の傷を持っていることを悪く思うのをやめ、その傷を終らせる第一歩を踏み出したことを誇りに思うことができます。抑圧を解体する第一歩を踏み出すことができます。そのことを決断できます。いますぐ決断できます。間違いを犯さないとは言いません。しかし決断することで世界は変わります。

それは気軽にできることではありません。真剣にこの問題を考えるには何度もセッションする必要があります。みなさんは役割を捨てる決断ができますか？ その役割のありとあらゆるものをです。なかにはどうしても捨てたくないものもあるでしょう。そうしたものに直面し、捨て去ることができますか？ 私はできると思います。それをするとします。簡単ではないとは思いますが。

みなさんはその決断ができると思います。前進しつづけるために、いつかそれをしなければなりません。何に直面すべきでしょうか？ まず、男性であることについて違う側面から考えなければなりません。見慣れた単純な社会の定義づけのすべてを疑わなければなりません。しかしみなさんにはできます。自分に

困難だったことを女性と一緒にやる必要があります。女性に耳を傾ける必要があります。自分の立場を守るためだけでなく、本当の意味で耳を傾ける必要があります。女性が何を伝えようとしているかをしっかり考える必要があります。そのなかには傷が含まれているかもしれません。しかし聴くことができなければ、傷がどこにあるのかもわからないのです。

Men and Sexism

プレゼントタイム 2007年10月号 41 - 43 ページより

Tim Jackins

翻訳 高坂明雄

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳 2007年。原文 2007年）。
この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。